

# 図書館留学：教職協働による学習支援

小畑 佳弘<sup>1)</sup> 藤掛久美子<sup>2)</sup> 森下 美和<sup>3)</sup> 安田有紀子<sup>4)</sup>

## 1 はじめに

近年、大学生の学力低下について多く議論されている。また、日本人学生の内向き傾向についても度々問題点として挙げられ、学力低下とともに日本人留学生の顕著な減少の原因と結びつけられることが多い。小林(2011)によると、海外留学実現に向けた問題点の一つに多くの学生が、「語学力不足」を挙げている。さらに、近年の「グローバルな人材」を求める企業側の動向を考えると、就職活動においても語学力がさらに重視されるようになってきている。

そこで、神戸学院大学図書館では、2011年度より「図書館留学」事業を展開している。本事業は、大学における教育の質保証を考えた時、図書館としてできることは何か、どのような役割を担ったら良いかという観点から、具体的な活動内容を構築し、本学の学士課程教育において、入学から卒業まで4年間に渡って、学生の語学力を高める学習を支援するためのさまざまな活動を展開している。また、「図書館留学」の取り組みが2012年4月1日より私立大学図書館協会研究助成「機関研究」に採択され、学習支援の様々な取り組みに対して、援助を受けることとなった。

本稿では、主に「図書館留学」事業における図書館と教員との連携による学習支援の取り組みを紹介し、その中でも多読の効果を測ったパイロットスタディーの結果、および今後の課題について報告する。

## 2 図書館留学

### 2.1 経緯と目的

図書館留学を通して、学生の語学力を高める支援を行うに至った経緯は主に、「新入生の学力低下」と「英語への苦手意識」の2点である。

まず、先にも述べたように、学生の学力低下については高等教育の場でしばしば耳にする。その中でも特に語学力(英語)の低下に注目した。本学では現在、イギリスとオーストラリアの大学に交換留学あるいは派遣留学制度が設けられている。交換留学制度のある協定校からは、毎年数名の留学生が本学に学びにやってくる。しかし、残念なことに近年ではこの制度を利用して、本学から留学生を派遣できていないのが現状である。これは、学生の英語力の低下に伴い、交換・派遣留学の募集要項に掲げられているTOEFLテストで応募資格を満たせるだけのスコアを取得できる学生がほとんどいないためである。

また、全体的に英語に対して苦手意識を抱いている学生が多く見られる。学部によっては、共通教育の外国語の単位を満たした後は、特に英語に触れる事なく進級していく学生も多い。また1年次生で履修した後、2年次生ではまったく英語に関わる授業を履修せず、

---

<sup>1)</sup>神戸学院大学図書館事務グループ長 <sup>2)</sup>丸善株式会社図書館サービス事業部関西センター

<sup>3)</sup>神戸学院大学経営学部講師 <sup>4)</sup>神戸学院大学法学部講師

1年間のブランクを経て英語を受講してくる学生も見受けられる。英語学習から離れてしまった学生は、そのブランクを取り戻せず、英語を苦手なものとしてしまい、英語関連の資格を取得できずに就職活動の時期を迎えてしまう。語学力を重視する企業が数多く存在する現在、結果として学生たちは就職活動に苦戦することが多いようである。

以上の問題点を改善し、学生の語学力向上を支援することを目的として図書館留学事業が開始されるに至った。まず、図書館を教育の場として明確に位置付けをし、学生が英語を学習できる場と、そのための適切な資料を提供できるように環境を整備、さらに、学生が楽しく英語学習を継続できるように多種多様な「図書館留学メニュー」を企画・提案、そして実施することで学習支援を行っている。

## 2.2 図書館留学の構成

2011年4月の時点では7種類の項目で構成されていたが、2012年10月15日現在、その数は10種類に増え、様々な形で図書館から学生に支援を提供している。また、図書館留学の活動を学内外に広められるよう図書館スタッフがメニュー表を随時わかりやすく作成し、案内を行っている。以下は、現在の図書館留学10項目である。

① 図書館留学コーナー：Oxford Reading Tree など、イギリスでは子供の読みものの教材として扱われているような質の高い本、洋絵本や日本の昔話の英訳本など、様々なジャンルの多読・多聴用図書が配架されている。また図書館スタッフによる季節ごとの図書展示（てくてく Selection）など、利用者の興味や関心をひく工夫をこらしている。



② My Favorite Book コーナー：多読・多聴用

図書の中から、参加学生同士が互いに推薦する本を紹介するコーナーである。図書館あるいは授業内で配布される所定の用紙に物語のあらすじを日本語で、書評を英語でまとめたものが常時展示されている。また教員も同様に利用者に向けて推薦図書の書評を行っている。

③ Bilingual Library：留学生や外国人教員の図書館利用支援の他、英語に親しみたい学生のために、図書館司書による英語での対応カウンターが設けられている。

④ 多読ラリー『てくてく English』：図書館でラリー参加の登録をし、「てくてくノート」と呼ばれるリーディング記録手帳を受け取り、簡単な本から、無理なく楽しみながら多読用図書を読み進める。「てくてくノート」には読んだ本の語数と、読み進めてきた総語数を記入する欄が設けられており、ゲームのような感覚で多読に取り組むことができる。

⑤ 多聴ラリー『English シャワー』：多読ラリーと同様に参加登録後に記録手帳を受け取り、記録していく。多読用図書にCDが付随するもので、CDを聞きながら文字を追ったり、シャドーイング（CDなどから聞こえてくる英語音声の影のように後から追いかけて声に出して読むこと）に取り組むことで、リスニング力の向上はもちろん、発

音の向上も期待できる。

- ⑥ シネマで週 1 English：視聴覚資料を活用し、映画から生きた英語に触れるチャンスを提供する。洋画や英語のアニメを英語字幕で見ることで、リスニング力を養い、また生きたフレーズを学ぶことができる。
- ⑦ Reading Square ～英語で語ろう！：アウトプットを目的としている。④～⑥の項目でインプットを補い、その次の段階として実際に英語で話す活動である。毎回、多読用図書を1冊選び、一緒に読み、その内容について英語で話し合う。
- ⑧ 英語で Book Talk：多読や多聴で上達した英語力を学内の人々に披露する場所を提供するもので、英語力向上のための工夫や努力したことなどを英語で発表する。
- ⑨ 英語で Talk ～Let's enjoy English～：実際にネイティブスピーカーと英語で話す機会を設けるために、定期的にイギリスからの交換留学生を図書館に招き、学生同士がさまざまなトピックで自由に会話を楽しめる空間を提供している。
- ⑩ キャリアコーナー『世界を舞台に働こう！』：語学力を生かして世界で活躍している人物やその仕事を紹介するコーナーである。

## 2. 3 多読・多聴とは

ここでは、特に学内において積極的に推進されている多読・多聴について紹介する。

### 2. 3. 1 多読とは

多読とは、文字通り「多く読む」ことである。高瀬（2010）によると、英語での多読は、辞書を使わなくてもある程度理解できるような比較的易しい本から始め、全体の内容を把握しながら多く読み進めていくことをいう。多読がもたらす大きな恩恵は「英語を英語で理解する」ことであり、リーディングの流れを止めずに読み進めるために以下の多読三原則が提唱されている（古川他, 2010）。これは図書館留学の中でも推奨されている。

#### 【多読三原則】

- 1) 辞書を引かない。
- 2) わからないところは飛ばす。
- 3) つまらなくなったらやめる。

多読では、100%の理解を求めず、わからない単語を飛ばして読み進めても、話の内容が理解できればそれでよいとされている。多読を開始する際、物語を理解するために、何度も辞書を使わなければならないような作品は自分のレベルに合っていないため、さらに易しい本を選ぶように学生に伝えている。

また、多読に取り組むにあたり、100万語到達が一つの大きな目標であり、英語力に顕著な変化が現れる数字とされている（酒井・神田, 2005）。読んだ語数と英語力の向上を考える時、後述する多読ラリー『てくてく English』の記録冊子、てくてくノートで総語数を記入していき、少しずつ語数が増えていくのをじかに把握できることは、参加者が多読を続ける良いモチベーションとなっているであろう。

### 2. 3. 2 多聴とは

多聴とは、多読と同様に文字通り「多く聴く」ことである。ひとつひとつの音声をしっかりと理解するのではなく、全体的な意味を理解するために、英語音声をたくさん聞くことでリスニングの力の向上が期待できる。多聴は、多読と切り離されたものではなく、ほとんどの場合、多読と多聴が一体化して行われている（高瀬, 2010）。

### 2. 4 多読・多聴ラリー

図書館留学では大きな要として多読ラリー『てくてく English』と多聴ラリー『English シャワー』を展開している。ラリーへの参加は、図書館で所定の用紙に登録内容を記入することで、それぞれ記録のための冊子（てくてくノート/Shadowing ノート）を受け取ることから始まる。本学の学生だけでなく、教職員、卒業生、さらに学外利用者も多読・多聴ラリーに登録することが可能である。また、獲得語数に応じて、図書館より記念品が贈呈される。5千語達成で図書館オリジナルクリアファイル、2万語で図書館オリジナルバッグ、4万語、6万語、10万語でそれぞれ図書カード（1,000円分）、50万語で図書カード（2,000円分）、100万語で図書カード（5,000円分）を受け取ることができ、参加者のモチベーションを高める一端を担っている。

多読・多聴ラリーへの参加者は2011年の開始から徐々に数を伸ばし、2012年10月25日現在で多読ラリーでは631名、多聴ラリーでは43名が登録している。また神戸学院大学同窓会からの支援により、多読・多聴用図書の実を図るとともに、私立大学図書館協会からの研究助成により、学習支援の様々な取り組みに対して、援助を受けている。

同窓会からの学校法人神戸学院創立100周年記念事業募金への1,000万円の寄贈は、「智の寄贈」「学びの寄贈」として今後10年間にわたり次の事業に使われる。

- ・智の寄贈：図書館留学「てくてく English」の英語教材購入費
- ・学びの寄贈：TOEIC 講座受講費の補助金、留学費の一部補助

また、「図書館留学」事業は、私立大学図書館協会の2012年度研究助成（機関研究）に「図書館留学；教職協働の学習支援への取り組み～語学力の向上に向けて～」という研究テーマで採択された。図書館と教員が協働して学生の語学力向上を目指すこと、図書館自体を一種の語学学習のための学校ととらえており、「多読コーナー」の設置、「多読ラリー『てくてく English』」などの企画がユニークであること等が採択につながった。

## 3 教職協働の取り組み

図書館留学事業において、特筆すべきことは図書館職員と教員が協働して学生の語学力向上に向けて学習支援を行う取り組みをしている点である。図書館の資料を利用して英語力を向上させる支援の形態は図1に表される通りである。



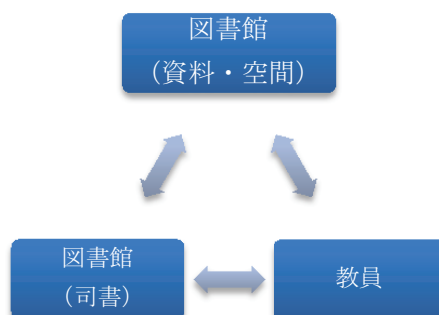


図1 図書館留学における学習支援形態

2012年10月15日現在、8名の英語、その他教員（専任・非常勤含む）が図書館留学を授業の中で取り入れるなど連携に参加している。各教員の連携の仕方はそれぞれ多少異なるが、以下で主な取り組みを紹介する。

### 3. 1 教員側の取り組み

#### 3. 1. 1 授業内連携

- (1) 共通教育英語あるいは専門科目の英語関連授業を担当する教員がその受講者を多読・多聴ラリーに参加させ、成績評価の一部に多読・多聴を加える（例えば、法学部の場合、半期で最低50冊／1万5千語以上読むことで全体成績の20%とする）。
- (2) 獲得総語数の増加にともない、図書館より記念品を受け取った場合、成績評価に一定ポイントを加算する。
- (3) My Favorite Book をライティング課題とし、良い作品は図書館内で掲示する。
- (4) リーディングの授業において、印象に残った多読用図書を選び、ポスタープレゼンテーションを行う。
- (5) プレゼンテーションの授業において、読み聞かせや口頭で My Favorite Book 紹介を行う。またトピックに基づいて、選んだ本から学んだことについて、パワーポイントを使ってプレゼンテーションを行う。
- (6) 図書館の共同閲覧室を利用し、館内で多読・多聴資料を用いた授業を行う。
- (7) 事前・事後テストを実施し、多読の効果を測る。
- (8) 図書館より受け取った「図書館留学アンケート」を授業内で実施する。

#### 3. 1. 2 授業外連携

- (1) 各出版社に問い合わせるなど、多読・多聴関連図書の選書協力。
- (2) 教員からの推薦図書を書評としてまとめ図書館内に掲示し、利用者に紹介する。
- (3) 「英語で Talk ～Let's enjoy English～」に学生を同伴して参加する。
- (4) 「Reading Square ～英語で語ろう！～」に向けて、課題図書を選書し、現場では英語での質疑応答の進行役を担う。
- (5) 多読・多聴を利用した附属高等学校との、高大連携授業を行う。
- (6) 図書館留学における多読・多聴の取り組みやその成果を大学英語教育関係者と共有し、広く理解してもらえるよう、英語教育関連の学会等でポスタープレゼンテ

ションや口頭発表を行う。

### 3. 2 図書館側の働きかけ

- (1) 図書館留学事業を充実したものとするために研究支援機関への働きかけを行う。  
⇒ 2012年度 私立大学図書館協会研究助成「機関研究」採択（2012年4月1日より1年間）  
⇒ 2012年度 神戸学院大学同窓会より活動支援補助の授与（2012年度より10年間）
- (2) 図書館留学事業を私立大学図書館協会阪神地区協議会、兵庫県大学図書館協議会等の研究会、セミナー等で事例報告を行うことを通じて、第三者評価を受ける。
- (3) 図書館、教員選書の多読・多聴関連図書の購入、配架、レベルごとにカラーラベル貼りなど、図書の管理をする。
- (4) 授業で利用する教員とその学生のための資料室の準備を行う。
- (5) 教員が授業内で回収した My Favorite Book の中から良い作品を選び、図書館留学コーナーに展示する。
- (6) ハロウィン、クリスマスといった季節ごとのテーマを設定し、図書館スタッフによる推薦図書の展示を行う「てくてく Selection」のコーナーの設置。
- (7) 『てくてくノート』、『Shadowing ノート』、図書館留学関連の広報チラシや図書館オリジナルグッズのデザインを考案する。
- (8) 「英語で Talk ～Let's enjoy English～」や「Reading Square ～英語で語ろう！～」など、図書館で実施するさまざまな語学力向上のためのプログラムを企画、提案し、教員と学生のスケジュールを取りまとめ、プログラムの日程を作成する。
- (9) 図書館留学に関するアンケートを作成し、利用者に対して実施し、最終的にその集計を行い、教員にフィードバックする。

以上で示された図書館側からの働きかけと教員側の取り組みにより、教職協働の取り組みは、互いの協力を得て学生の英語力向上の支援となっている。

## 4 パイロット調査

図書館留学の効果を測るため、2011年度後期授業内で、多読ラリー『てくてく English』への参加を義務付けた。学期の始めと終わりに、35名の学生（1、2年次生）に対して Minimal English Test (MET6) というリスニングテストを行い、さらに、そのうち13名に対して6コマ漫画を用いたスピーキングテスト（ストーリー・テリング課題）を行った。MET6では、CDを聞きながら6語に1語の割合で空欄（計65箇所）を埋めていく（所要時間は約5分間）。ストーリー・テリング課題では、受験者は「ピクニック」をテーマにした6コマ漫画を手渡され、3分間でストーリーを考え、3分間で英語で説明するように指示された。受験者の発話はICレコーダーに録音され、その後文字に書き起こされた。いずれのテストも、事前・事後テストの形で実施し、多読の効果を調べた。

*t* 検定の結果、MET6では、事前・事後テスト間で平均正答数が18.6語から22.2語に有意に伸びた ( $t(34)=4.23, p<.001$ )。ストーリー・テリング課題では、書き起こした発話

の総語数 (tokens) と異なり語数 (types) をカウントしたところ、事前・事後テスト間で総語数は48.2語から63.2語 ( $t(12)=4.22, p<.01$ )、異なり語数は24.2語から30.2語 ( $t(12)=4.16, p<.01$ )と有意に伸びた。いずれのテストにおいても、事後テストでより多くの異なる語を産出していたことから、言語形式 (リスニング/スピーキング) にかかわらず、多読によって未知語の習得および既知語の検索が促進された可能性が示唆された。

## 5 まとめと今後の課題

図書館留学の取り組みが始まってから、すでに1年半が経過しようとしている。利用者にとって、常に魅力的な内容にするために図書館スタッフが様々なアイデアを出し合いながら新しい企画を試みている。アイデアのつまった企画や提案に教員が応え、協力して学習支援を行う体系が少しずつではあるが着実に整ってきたように感じている。多読・多聴用図書増加により、図書館留学コーナーが充実してきており、ラリーへの参加者数も増加を続けている。また、10月29日現在で、英語で Talk ~Let's enjoy English!~は3回目を迎え、さらに Reading Square ~英語で語ろう!~も実施を実現することができた。これらの企画を通して、より多くの学生が英語に触れる楽しみを体感し、英語をさらに身近に感じることができ、学習意欲を高めてくれることを強く期待している。また、これまでは支援不足で留学を断念してきた学生が多くいたが、今後は図書館留学とその教職協働の支援のもとで、一人でも多くの学生が、英語関連資格講座の受講から語学研修の参加、さらには交換・派遣留学への夢を叶えられるよう継続した支援が必至である。

入学から卒業まで語学力向上をサポートすることが図書館留学の大義であるが、本学では2キャンパス制をとっており、複数の学部が1、2年次生と3、4年次生で異なったキャンパスで学習することとなっている。現在、留学生との交流を含む多くの企画は有瀬キャンパスで行われているが、ポートアイランドキャンパスでも同様の企画が行われ、キャンパスを移った後も続けて学習意欲を高められる図書館環境と企画、そして2キャンパス間での教職協働の試みをどのように継続し体系を整えていくべきかが、今後の大きな課題である。

さらに、附属高校との高大連携を視野において、附属高校の英語科教諭および図書室との連携によって、高校の3年間と大学の4年間の計7年間にわたり、図書館留学で語学力の向上を図れるようにすることも今後の課題である。

## 参考文献

- 古川昭夫・神田みなみ・黛道子・佐藤まりあ・西澤一・畑中貴美・宮下いづみ (2010)『英語多読完全ブックガイド』第3版 コスモピア
- 小林明 (2011)「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」ウェブマガジン『留学交流』5月号 Vol. 2
- 酒井邦秀・神田みなみ (2005)『教室で読む英語100万語多読授業のすすめ』大修館書店
- 高瀬敦子 (2010)『英語多読・多聴指導マニュアル』大修館書店